

## 野鳥お勉強会とバンダー

江別市 富川 徹

### 1. 野鳥お勉強会の誕生まで

私の主宰する野鳥お勉強会（以下、「お勉強会」という）は、1987年（昭和62年）にスタートした会です。当時は自然ブームが定着化し自然環境や自然保護という言葉が聞かれて久しい頃で、関係の団体はにぎわいと活気に満ちていたように思い出されます。また、世では自然や環境に関するシンポジウムやイベントも数多く催され、特に環境分野への高揚がありました。しかし、講演会の聴講では、どちらかというところ“聞かされる”というやや一方通行的なパターンが主流で、質問や意見も一般的かつ単純な質問などを言うには躊躇するような雰囲気が漂っていたと記憶します。そうした中、もっと身近なことを自由に語り話し合う、そして楽しく情報交流のできる場としてサロンがあればいいと個人的な想いがありました。まさしく「好きな鳥や自然のことを仲間と楽しく語り合える場」の創出を描いていたのです。

その背景として少し遡りますが、鉄腕アトム原作者の手塚治虫氏（漫画家）が、「人の意思の交流が新しい社会づくりに貢献する」として、「人の出会いの場」づくりを目指したサロン「集」をつくっていたことに豪く感動したことがあります。ゆえに、それらの考えを土台に、「鳥や自然の疑問や不思議を解消する場につなげる」、「身近な話題と人との交流から人的なネットワークの構築（会員獲得）を目指す」ことを我々もやってはどうかと考えたのです。そんなことを何気なく当時の北海道野鳥愛護会の柳沢信雄副会長に話すと、「それはいいことだ！」と話が弾む形で、いつも幹事会后などに必ずや寄っている居酒屋（当時「夢二亭」）の店主に相談すると、時世（週休二日制による土曜休日で、ビル街のサラリーマンが来なく売り上げに困っていた。そのため開催は歓迎され貸切可能となる）があつてすぐに意気投合となり、とんとん拍子に会の発足へと至ったのです。



写真1 野鳥お勉強会の風景（朝日新聞 050202 から）

### 2. 参加者は？講師は？

お勉強会は、月1回、今は第三土曜日（当初は第二土曜日）、会場は概ね居酒屋で行っています。また、地方開催（札幌以外の地域）も行っており、最近では「野鳥お勉強会 in 帯広（2010.11）」、「野鳥お勉強会 in 旭川 外来種ワークショップ（2007.9）」があります。

お勉強会の「お」は“あまり堅苦しくなくざっくばらんに”ということの意味合いがあります。会場は地方開催などを除くと大半が居酒屋で、お酒のある飲食を伴う設定（宴会形式）で行われます。今日まで長年に渡って会が存続しているのも、ある意味で“お酒のおかげ”と言ってもいいのでしょうか…。でも、「勉強会なのにお酒を飲みながらなんてだらしがない、不謹慎、不真面目、のんべえ会」などと周りからお叱りを受けそうな言葉が返ってきそうですが、不思議にそんな不評などはこれまでほとんどありません。話題発表する講師や参加者の人柄は勿論ですが、テーマや内容等はどれをとっても“真面目”そのもので、“お酒の力を借りて”ではないですが、各々の講師の話題や関心事をダイレクトに熱く語る姿勢、自由に交流する場の存在ということでは、他の会にはないものとして自負できるものと受け止めています。

お勉強会の開催回数は1987年の第1回開催から今年2011年1月で第283回を数えます。このうち、参加者数については54回までの参加者が不明なために、ここでは都合それらを省き整理しますが、55回から今年1月の283回までの228回の開催で、この間の参加者数は3291人、平均では14.3人/回という数字になります。平均人数が出たので単純に第1回から54回までに当てはめてみると770人とみることができ、これまでのお勉強会の全参加者を推測してみると述べ4000人を超える数になります。また、55回以降は、参加記録をとっていますので内容実績などの分析もある程度は可能です。ですから、公表は差し控えますが一人ひとりの参加回数なども分かるというものです。

参加実績についてみると（図1）、参加回数がたった1回というのは363人（58%）、2～9回は167人（26%）となり、全参加者の630人に対して、大半が1回もしくは10回に満たない“低参加組”となっており、リピーターの少ない残念な結果であることも隠せません。こうしてみると、都合の整理ですが“時々参加組”の10～19回以上は計42人（7%）で、“常連組”といえそうな30回以上はわずか25人（4%）とさみしいものとなっています。

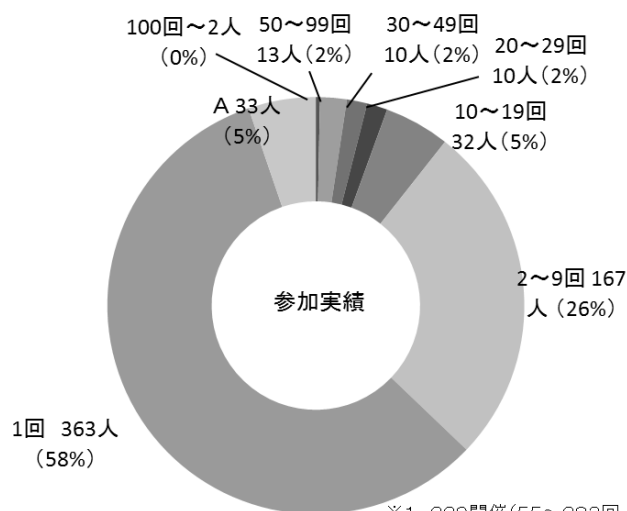


図1 参加実績

※1. 229開催(55～283回) 延べ参加数3291人  
 ※2. 図中Aは54回開催以前

次に、講師についてみると、複数回を担当された講師もいますが、相対的に発表時の職業で整理すると、会社員が64人（22%）と最も多く、次いで公務員45人（16%）、自然団体会員43人（15%）、大学院・学生40人（14%）の順となり、以下の大学教授や学校教師、団体・研究職員などの専門的な立場となる先生及び研究者を上回っているというおもしろい結果が得られました（図2）。ここでは、バンダーということでは整理してはいませんが、参加

者や講師ということではバンダーの皆さんなくして語られないお勉強会であったので後述で少し詳しく述べてみます。

この会の講師は、概ね自主的に得意な分野や話題について熱弁を振舞うというのが基本となっているので、参加者も身近な会話で納得のいく議論ができるという魅力があり、他のシンポジウムや講演会などにはない特徴を有しています。また、そうした講師人を振り返ると、中では本会を通じて自然環境に関心を持つなど、関連の職業やボランティアなどの各方面で活躍されるメンバーを排出していることも少なからず自負できるところです。

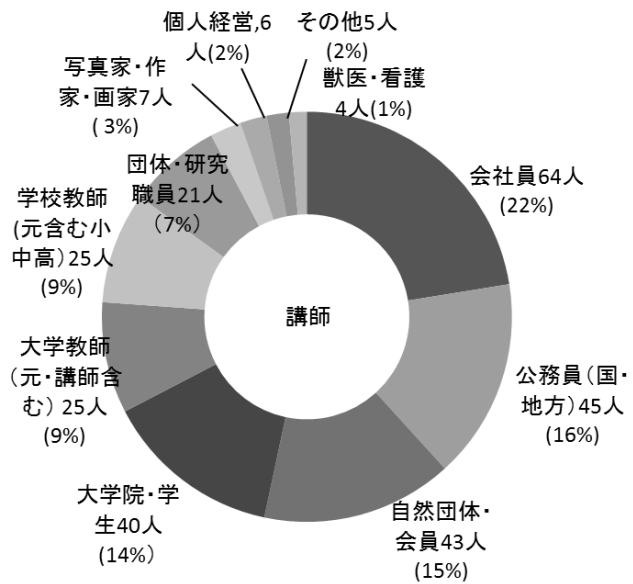


図2 講師 ※283開催中285テーマより

### 3. 語られてきたこと

お勉強会で語られてきたことを整理します。

気になる話の内容ですが、ジャンルとして区分してみると、やはり野鳥お勉強会というだけに“鳥類”に関する内容が163件(57%)と最も多く6割近くあり、海外探訪32件(12%)、哺乳類18件(6%)という順となっています(図3)。本会は野鳥のみならず自然のことは何でも行っていますので、山や地形、魚、ザ

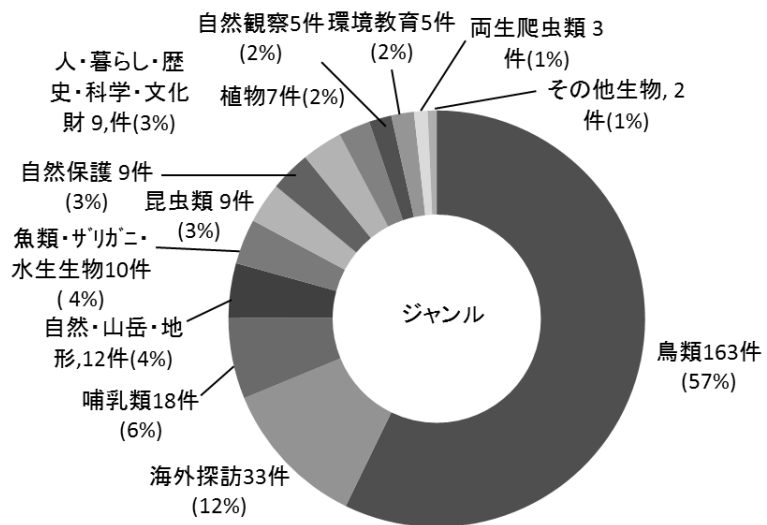


図3 ジャンル ※283開催中285テーマより

リガニ、昆虫、自然保護、植物、その他とジャンルは様々なのです。もちろんバンディングの話のほか、海外の野鳥バージョンという非日常的なところでの貴重な体験や珍しい鳥の話、観察テクニックの話、そして北海道の代表種であるヒグマ、エゾシカに、最近では希少なコウモリや外来生物アライグマの分布・生態などの哺乳類の話も人気です。

一方、その他の分野としては、「飛翔に憧れて」や「鉄の鳥と環境破壊」といった現代の

航空機の話、「地球にやさしい土の話」、「廃棄物対策の現状と課題」、「遺跡調査からの自然情報」、「恐竜発掘体験」、「蘭学事始め（オランダの環境の取り組み）」、「地域活性化の話」など、身近な環境に関わっての興味ある内容ですが、新鮮な気分で聞き入れるものでした。加えて、「熱き“鳥”を語る講師たち」と題して自ら参加した想いを自らのメモと講師の似顔絵で振り返る話でしたが、この会は何でも話題にしてしまうというのも会ならではの盛り上がりました。

鳥類に関する開催内容では、「種」、「記録・分布」、「生態・行動」、「地域」など、“鳥について多角的にいろいろと知りたい“というのに関わり、特に北海道という地域特性、種、生活、生息状況といった内容が目を引きます。また、テーマで多い鳥種（類）としては、猛禽類が最も多いほか、アオサギ、カラス、マガン、フクロウ類、海鳥、カモ類、タンチョウ、クマゲラの話も比較的多く語られています。特に猛禽類は人気があり、生態系ピラミッドの視点から、および環境調査等の対象種とされているなどから関心度が高いとかがえます。その他、マガン、タンチョウ、クマゲラ、フクロウ類の希少種においても好調で参加者も多く集ります。また、これらを含めて取り上げられた鳥は46種（類）に上り（表1）、その他アホウドリ、トキ、エゾライチョウ、ウズラなどの希少種の他、ウミネコ、ヤブサメ、スズメなど、一般的な種についてもやや専門的ではあるものの、身近な種として分かりやすい話は格別に好評でありました。

記念講演会としては、100回記念、10周年記念、150回記念、200回記念、20周年記念と行いましたが、どれも第一線の先生方をボランティアの「只！」でお呼びしたというのも“この会ならではの”といえるものです。いずれにしても、こうした貴重な話は可能な限り掘り起してとりまとめていきたいとは思っています。

こうしてみると、お勉強会は一般的に生きものの保全や取組みに繋がる先進的かつアカデミックな話題が数多くみられ、真剣で真面目な講師陣にも恵まれてここまで来れたことに驚かされます。

表1 テーマで多い鳥（種）

アホウドリ	オオセグロカモメ
ゴシロウミツバメ	ウミネコ
アオサギ	ウトウ
サギ類	ツツドリ
トキ	シマフクロウ
マガン	リュウキュウコノハズク
オオハクチョウ	オオコノハズク
ガンカモ類	フクロウ
ミサゴ	ヤマセミ
オジロワシ	クマゲラ
オオ効	アカゲラ
ハイ効	ショウトウツバメ
ノスリ	ツバメ
サシバ	イワツバメ
チュウヒ	ハクセキレイ
シロハヤブサ	ビンスイ
チゴハヤブサ	(カラフトビンスイ)
ワシ効類	ヤブサメ
エゾライチョウ	ウグイス
ウズラ	スズメ
タンチョウ	ムクドリ
ツル類	ハシボソガラス
シギ・チドリ類	ハシブトガラス
	46種(類)

#### 4. バンダーたちの話題から

さてバンダーについてのお話にいきましょう。

お勉強会に講師として登場されたバンダーたちについて現時点までを整理をすると、これまで29人で49回開催（テーマ）が行われていて、これは全開催の17%強で思ったより多いことには驚きです（表2）。本会の開催地は札幌が主であるため、その近郊に住む方々や、何かの都合等で来られる方にお願ひしてきた感があります。現状の道内のバンダー数を正確には把握していませんが、今後も各々のバンダーが調査を行っている場所での得意なお話をお願いしたいという希望があります。このお勉強会にお金があつて自由に講師をお呼びできる旅費等を払えるならいいのですが…。

表2 バンダーたちの話題

No.	回	年	月	講師（敬称略）	話 題	キーワード1	キーワード2	キーワード3	備考
1	126	1997	12	有田智彦	焼尻島の鳥	焼尻島	観察記録	鳥類標識調査	
2	258	2008	12	一北民郎	北海道のチュウビについて考える	チュウビ	生息状況	課題	
3	32	1989	12	梅木賢俊	野生生物保護対策の現状 -鳥類から-	野生生物	鳥獣行政	ツグフル	
4	76	1993	10	大館和広	コムケ湖の鳥はどこから来るか？	野鳥	コムケ湖	鳥類標識調査	
5	10	1988	2	大畑孝二	ザンクチュアリを訪れる野鳥と人々	野鳥	ウトナイ湖	普及啓発	
6	210	2004	12	奥山正樹	野生ウズラの現状について	ウズラ	人との関わり	狩猟	
7	30	1989	10	小畑淳毅	夜空に輝く野鳥たち	星	鳥	普及啓発	
8	94	1995	4	小畑淳毅	香港探鳥アドバイス	野鳥	香港	観察記録	
9	252	2008	6	小畑淳毅	昨今における環境をめぐる鳥の話題	環境報道	生息状況	自然保護	
10	97	1995	7	川路則友	ヤブサメの生活	ヤブサメ	生態	鳥類標識調査	
11	110	1996	8	川路則友	ササと鳥	ウグイス	生態	鳥類標識調査	
12	266	2009	8	川路則友	札幌周辺でのツツドリと宿主となる鳥とのビミョウな関係	ツツドリ	ヘルパー	札幌	
13	278	2010	8	川路則友	狩猟鳥について考える！	狩猟	狩猟鳥	普及啓発	
14	190	2003	4	河原孝行	札幌周辺の標識調査から -羊ヶ丘の渡り鳥とショウトウツバメ調査-	ショウトウツバメ	札幌羊ヶ丘	鳥類標識調査	
15	92	1995	2	小杉和樹	利尻島の鳥	利尻島	観察記録	鳥類標識調査	
16	159	2000	9	小杉和樹	標識調査から得たウミネコの移動	ウミネコ	渡り分布	鳥類標識調査	
17	166	2001	4	佐田正行	苫小牧宮の森における鳥の渡り	渡り	調査方法	鳥類標識調査	
18	155	2000	5	佐藤正秀	鳥の種名と正しい呼び方	種名	呼び名	観察	
19	60	1992	6	佐藤理夫	函館山の野鳥の渡り	函館山	渡り	鳥類標識調査	(函館開催)
20	7	1987	11	島田明英	街に進出する野鳥たち	野鳥	都市鳥	行動	
21	211	2005	1	島田明英	北海道野鳥図鑑の編集のことなど	野鳥図鑑	編集	鳥類標識調査	
22	196	2003	10	白木彩子	ワシ類の保護を考える	オシロシ	保護調査	鉛中毒問題	
23	122	1997	8	武本行和	東南アジアでの鳥類標識調査体験記	野鳥	タイ	鳥類標識調査	
24	198	2003	12	玉田克巳	帯広におけるカラスの生態	カラス	帯広市	生態	
25	227	2006	5	玉田克巳	みんなで考えよう シマアオジの保全対策	シマアオジ	保全	絶滅危惧種	
26	239	2007	5	玉田克巳	絶滅危惧種シマアオジ さてどのように保護するか？	シマアオジ	保全	絶滅危惧種	
27	189	2003	3	辻幸治	鳥島におけるアホウドリの現状報告	アホウドリ	鳥島	鳥類標識調査	
28	2	1987	6	富川徹	野鳥の調査方法について	野鳥	調査方法	普及啓発	
29	37	1990	5	富川徹	北海道の野鳥観察記録	野鳥	記録	資料文献	
30	93	1995	3	富川徹	堀株川河口の動物たち	鳥獣類	調査記録	自然環境保護	(兼座談会)
31	137	1998	11	富川徹	アオサギの生息調査と環境保全	アオサギ	生息調査	生態	
32	186	2002	12	富川徹	欧州に学ぶ湿地の保護 -マガンとの共存を目指して-	マガン	オランダ・イギリス	ワイルドユース	
33	250	2008	4	富川徹	支笏湖の鳥	支笏湖	鳥類相	観察記録	
34	270	2009	12	富川徹	積丹半島におけるイワツバメの構造物利用	イワツバメ	積丹半島	構造物利用	
35	259	2009	1	富川徹・小畑淳毅	礼文島 サンバの記録と野鳥たち	サンバ	礼文島	鳥類標識調査	
36	285	2011	3	中田達哉	カイツブリ- 身近な水鳥の生活を探る-	カイツブリ	長沼町	生態	
37	145	1999	7	中村茂	カモ類・タカ類 雑学	カモ・タカ類	鑑別	分類	
38	185	2002	11	花田行博	カラフトビンズイとビンズイ	カラフトビンズイ	ビンズイ	鳥類標識調査	
39	173	2001	11	伴野俊夫	室蘭の渡り鳥	渡り	室蘭	鳥類標識調査	
40	161	2000	11	広川淳子	オオジョリンの渡りについて	オオジョリン	渡り	鳥類標識調査	
41	228	2006	6	藤巻裕蔵	エゾライチョウの話	エゾライチョウ	生態分布	保護	20周年特別記念
42	48	1991	4	猿子正彦	モエレ沼付近の標識鳥類	野鳥	モエレ沼	鳥類標識調査	
43	156	2000	6	猿子正彦	渡島大島に野鳥を訪ねて	渡島大島	離島	自然保護	
44	272	2010	2	猿子正彦	鳥とサクラ	桜	野鳥	魅力	
45	5	1987	9	三浦二郎	鳥類標識調査の方法と功績	渡り	調査意義	鳥類標識調査	
46	3	1987	7	三木昇	森にあそぶ -自然の楽しみ方-	森	ネイチャーゲーム	環境教育	
47	53	1991	11	渡辺紀久雄	札幌米里地区の野鳥のゆくえ -オオジョリンの記録から-	オオジョリン	札幌米里	鳥類標識調査	

さて、ここでは発表者や発表回数には言及しませんが、バンダーによる発表内容について都合3つのキーワードをあけて分類してみると、「鳥類特定種」、「地域」、「鳥類標識調査」が多い部類となり、これに続いて「その他」、「環境保全」、「鳥類一般」、「調査記録」などのとなりました（図4）。これら鳥類の話は、調査地の概況、調査方法、調査記録、捕獲鳥

種、リカバリー (Rc) と渡り傾向などが基本内容となっており、とりわけマニアックな部分を織り交ぜながら語りはバンダーの個性とセンスを感じさせます。どれもバンディング調査に対する強い思いが込められており、やはり仲間の話は興味深く嬉しいものです。ここで「鳥類標識調査」の話は20件でしたが、そのうち道内調査に関わっての主要な地域をあげると、次の13件がみられました。

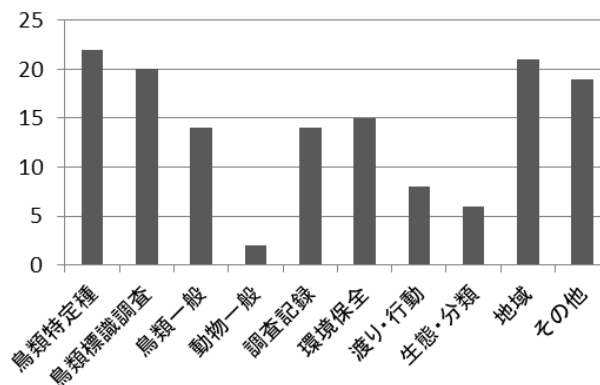


図4 キーワードによる分類

道東：コムケ湖（大館）、足寄（花田）

道北：利尻島（小杉）、礼文島（富川）、焼尻島（有田）

道央：札幌米里（渡辺）、札幌石狩川河口（広川）、札幌モエレ沼（猿子）、札幌羊ヶ丘（川路・河原）、長沼（島田）

道南：苫小牧宮の森（佐田）、室蘭（伴野）、函館山（佐藤）

バンダーたちの話の時には、たいてい鳥に詳しい人も集まってくる傾向があり、標識調査によく耳を聞き入れてくれます。また、各バンダーたちは特別に熱い語りぶりで親切丁寧な分かりやすい説明とあって、楽しく充実性に満ちた対話という印象があります。今後も公表範囲内で鳥類の渡りや保全に関する話題の他、先の調査地における新たな知見を含めて道内各地の記録や情報などに期待を寄せています。

昨今、標識調査の実施においての各種のトラブルが発生される中で、こうした場でもバンディングに関して一般の人の理解を得るための啓蒙の場につながればと思っています。

## 5. バンダー連絡会に想う

さて、話は少し古くなりますが勉強会ということで関連事について振り返ってみます。会員の川路氏（森林総合研究所）は、転勤で札幌に来られた1991年（平成3年）から森林総研の敷地内でバンディングをされていました。そんな中、札幌周辺のバンダーに呼びかけ“札幌地区バンダー研修会”と称して、1994年（平成6年）から95年（平成7年）にかけて3回（森林総研内2回と居酒屋1回）のバンディング勉強会が行われました。基本的には福島潟の勉強会に類似するところがありますが、“北海道バージョン”ということで実行されました。研修は網場で捕獲した個体を手にしてで、1回目は齢査定の有効な方法として、スズメ目各種の第一回冬羽と成羽の違いについて経験にもとづく知識を出し合って論



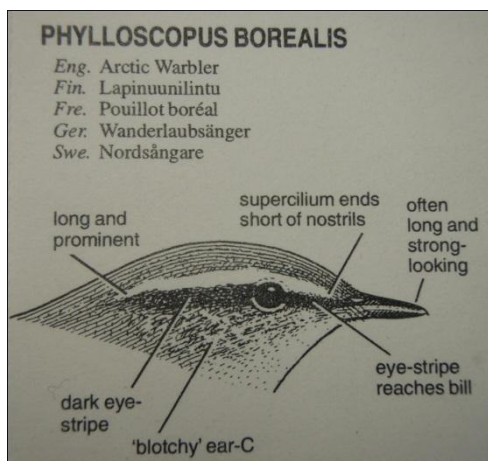


写真2 メボソムシクイ

(Lars Svensson 1975 Identification Guide to European Passerines より)

議し、最終的に頭骨の気骨化をみる訓練も行いました。2回目は識別困難種（特にムシクイ類）の識別法として、道内に一般的なウグイス・ムシクイ・センニュウ・ヨシキリ類の識別の他に、北海道を通過してもおかしくないヤナギムシクイ、キタヤナギムシクイ、チフチャフなどの珍鳥・迷鳥について亜種識別一覧表を用いながらの研修でした。まさにこれこそがバンダー勉強会であると思いますが、バンダー連絡会でも情報交流を含めた研修会や共同調査を定着させていくことが望まれます。

ちなみに、野鳥お勉強会では川路氏には4回もお話を受け賜りました。偶然にも季節は夏（7月1回、8月3回）で、ビールの美味しい季節がお登場のトレンドとなっています。というので、今年のもお願いしてみようかなと・・・(笑)。

ここで、話が少し飛びますが個人的に思っていること述べておきたいと思います。

今、バンダー連絡会では武本氏が中心となって Rc データから渡りルートの探りを試みています。その成果は道内の各地域で頑張っているバンダーがいるからこそできるのだと思います。今のところアオジ以外の各種の渡りを知るにはデータが不足しているということの見える結果となりました。各種の鳥の渡りのルート知るにはデータの蓄積が不可欠です。それを解明するには基本的にはバンディング調査の継続性が重要で、効果的に進めるためには目標をもった調査の取り組みが必要だと考えます。すなわち、よく話にはあがることですが、多くの放鳥数や種をターゲットとして捕獲効率のよい調査地と時期を選び、集中的に共同調査などを展開していく取り組みが有効であると考えられます。まずは、今回の道内バンダーで都合データを出されなかった方々へ本趣旨の理解を再びお願いし、今あるデータをより充実させること、武本氏が言うように山階鳥研のデータや環境省データベースを利用補完しつつ、より正確なものを目指すことだと思います。いずれにしても、個々のデータはそのバンダーの“宝、財産”なのですから、事は慎重に進めなければなりません。蓄積されたデータを整理して提供者に還元し共有の財産とし、それが本来の標識調査の成果につながるというバンダーの共通認識をもつことだと思います。それらは極めて重要なデータですから、その扱いと管理には十分な注意を払い、公表内容等を含め慎重に進めていくことが必要であると思います。

一方、道内のバンダー数の具体数は把握していませんが、バンダー仲間も年とともに確実に高齢になっていることは皆さんも領けるところです。昨今ではどこの野鳥や自然の団体も会員の減少傾向が強まっていく傾向のようで、私たちの鳥類標識調査のゆくえとして考えても心配事があるといえます。今さらではありませんが、バンダー連絡会として理想

的な後継者の育成（やる気のある地域バンダー、若いバンダーの育成など）や、道内調査地と標識調査のあり方などについて、もっと話し合えたらと思います。

## 6. おわりに

鳥と人とお話、そして少しだけ？お酒の好きな方々の集うお勉強会ですが、バンダーの皆さんの協力なくしてここまで来られなかったものと、あらためて関係者に対して感謝いたします。

昨年度、お勉強会はサントリー世界愛鳥基金の「地域愛鳥活動助成」を受け、「もっと野鳥を語り関心を広めたい！会活動の環境整備とホームページ作成」に取り組み、欲しかったプロジェクターの入手とブログ公開にこぎつけることができました。これで世間からも少しは認められる会になったと、“肩の荷が降りたという気持ち”と言いたいのですが、私を含む周りの関係者も高齢の仲間入りということで、後継者不足に悩むといわざるを得ません。

“継続は力なり”とはいいますが、いつの間に今年25周年（四半世紀）、そして来年は300回開催を迎えることとなります。何とか“記念開催を行わねば・・・”と気持ちばかりが逸るところですが、この会こそ“会活動の再確認”を自ら胸に抱き、“これまで通り無理せず心し進めるしかない”と思っている次第です。今後も無理せずのご参加はもとより、ご指導ご協力の程よろしく願いいたします。

※本稿は、北海道野鳥愛護会会報の北海道野鳥だより第164号（2011.6）に掲載予定の「野鳥お勉強会と人と鳥と・・・」に追記・改変を行ったものである。

### 野鳥お勉強会

開催日時：毎月第三土曜日（原則）、18:00～

開催場所：鳥太郎 大通店（札幌市中央区大通西5丁目昭和ビル地下1階）

問い合わせ：野鳥お勉強会 代表 富川 徹

E-mail: [tomikawa@toriben.org/](mailto:tomikawa@toriben.org/) Homepage: <http://www.toriben.org/>